

頭付アンカーボルトの計算検討書

「各種合成構造設計指針・同解説」(2010年日本建築学会発行)に準拠

以下の条件にて傘型アンカーボルトの引抜耐力を、「各種合成構造設計指針・同解説」(2010年日本建築学会発行)第4編各種アンカーボルト設計指針4. 2頭付きアンカーボルトの設計の算出方法に準拠し、短期許容引張力を算出しました。

仕様 高耐力フレックスアンカーボルト

低減係数(短期荷重用) $\phi 1=1.0$

$\phi 2=2/3$

軸断面積 $_{sc} \alpha_1$

165.13	mm ²
--------	-----------------

設計基準強度 F_c

21	N/mm ²
----	-------------------

笠部

34

有効断面積 $_{sc} \alpha_2$

157	mm ²
-----	-----------------

埋設寸法

300	mm
-----	----

A_c

93297.38

$_{sc} \alpha = \text{Min}(_{sc} \alpha_1, _{sc} \alpha_2)$

157	mm ²
-----	-----------------

基礎幅

150	mm
-----	----

A_0

742.41

降伏点強度 $_{s} \sigma_{pa}$

480	N/mm ²
-----	-------------------

$_{c} \sigma_t = 0.31 \sqrt{F_c}$

1.42

①既存コンクリート躯体中に定着された頭付きアンカーボルト1本当たりの許容引張力 P_a は、以下の(1)式および(2)式で算定される値のうち小なる値とする。

ただし、短期許容引張力において、アンカーボルトの降伏を保証する設計が要求される場合には、(2)式による短期許容引張力が、アンカーボルトの上限強度により算出した(1)式による値を上回るようにする。なおその場合においても短期許容引張力が規格降伏点強度により算出した(1)式による値とする。

$$P_{a1} = \phi_1 \times _s \sigma_{pa} \times _{sc} \alpha \quad \dots \quad (1)$$

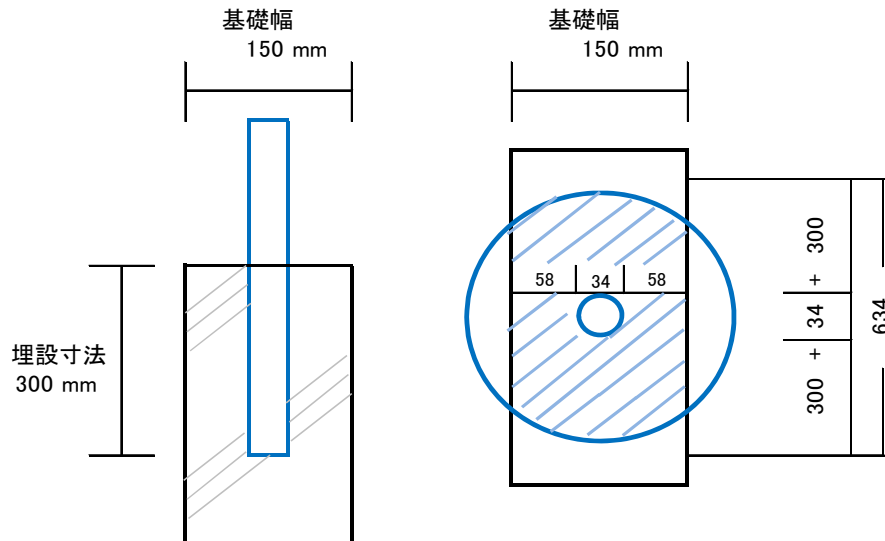
$$P_{a2} = \phi_2 \times _c \sigma_t \times A_c \quad \dots \quad (2)$$

(1)頭付アンカーボルトの降伏により定まる場合のアンカーボルトの許容引張耐力

$$P_{a1} = 1 \times 480 \times 157.00 = 75.36 \text{ kN}$$

(2)定着したコンクリート躯体のコーン状破壊により定まる場合のアンカーボルトの許容引張力

$$P_{a2} = 2/3 \times 1.42 \times 93297.38 = 88.32 \text{ kN}$$



$P_a = 75.36 \text{ kN}$

②頭付きアンカーボルトの許容引張力時の頭部支圧応力度は、コンクリートの支圧強度 f_n 以下となるようにする。

$$P_a / A_0 \leq f_n \quad \dots \quad (3)$$

$$f_n = \sqrt{A_c / A_0} \times F_c \quad \text{※} \sqrt{A_c / A_0} \text{ が6を超える場合は} \sqrt{A_c / A_0} = 6 \text{ とする。}$$

$$\sqrt{A_c / A_0} = 11.21 > 6 \quad \text{より} \quad \sqrt{A_c / A_0} = 6$$

$$A_0 = 742.41 \quad f_n = 126$$

$$P_a / A_0 = 101.51$$

$P_a / A_0 \leq f_n$ を確認。

※本検討書は耐力算出を記載の条件下で行った計算一例です。各現場納まり・条件によっては耐力が増減いたしますので、よくご確認の上、正しくご使用ください。